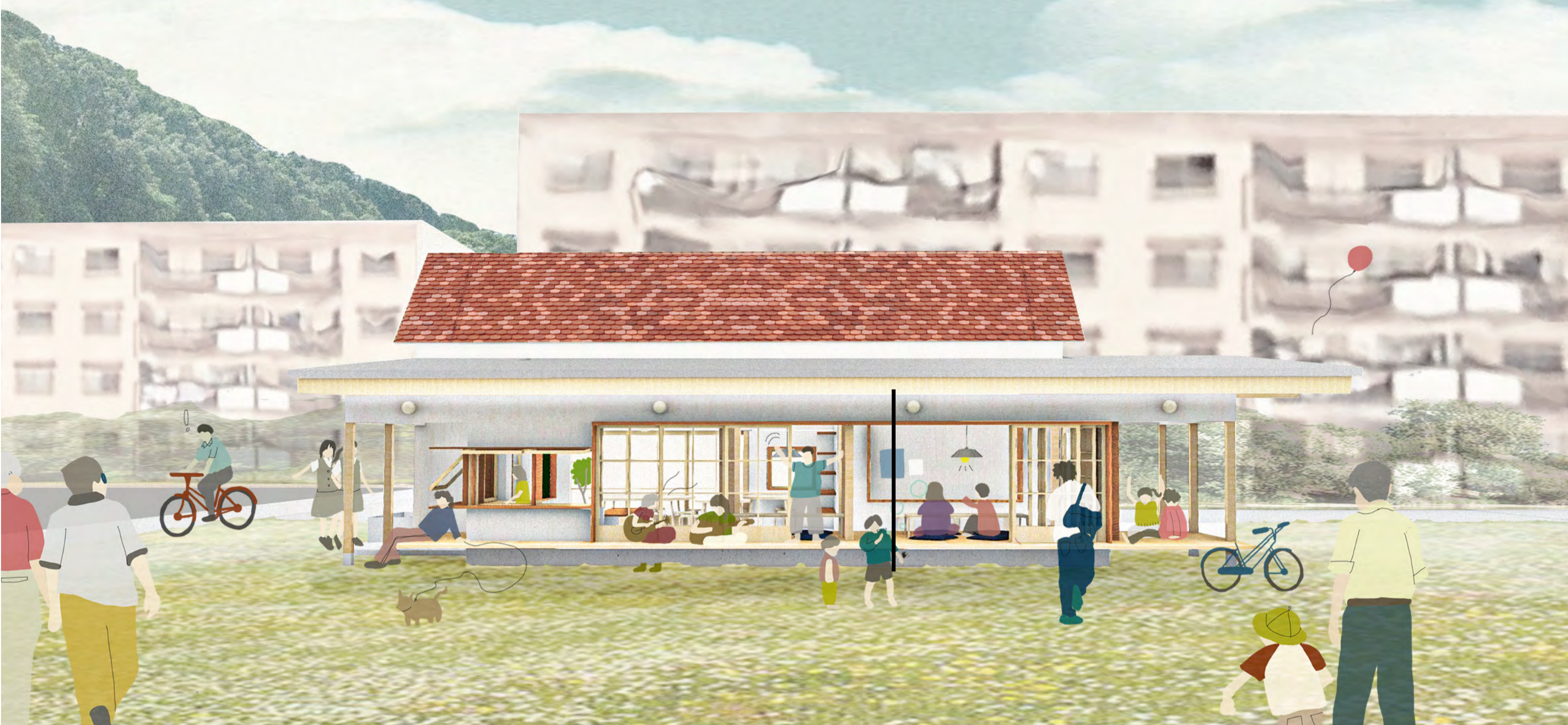


みんなの「にわ」のような集会所



自然に集えるとは

コンセプト 水呑の「にわ」

美しい山並みと芦田川に挟まれ、豊かな自然がまちの人たちと共に歴史、文化、暮らしを支えているのが、福山市水呑町です。この計画においては新しい集会所を、団地のみなさんにとって暮らしやすい場の基盤としてつくとともに、子供たちが学び、高齢者の方の生きがいとなり、まちのみなさんから愛される場所として捉えます。水呑の自然を感じられる大きな緑側を中心に居場所をつくり、みんなの暮らしの拠り所として利用できる「みんなのにわ」のような集会所を提案します。

「にわのような集会所」3要素

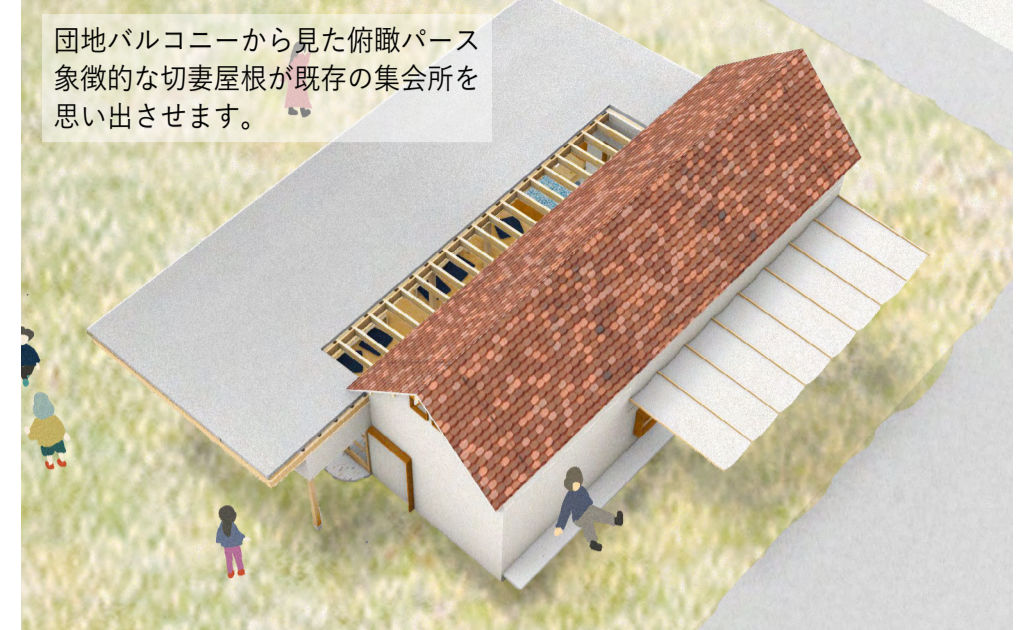
- ①たくさん人があつまる 広場**
内部空間、外部空間とともに大らかな居場所を設けることで、あらゆる人が気軽に立ち寄れる空間をつくります。
- ②自分たちで手を加えていく ガーデン**
みなさんが日常のさまざまなシーンで集会所を使いこなし、共に育んでいくことのできる柔軟性・機能性を持った計画とします。
- ③住民の安心する テリトリー**
みなさんをつくるプロセスを大切に、「ここに居てもいい」という心の居場所となる建築をめざします。

誰もが暮らしやすい住環境の実現に向けて

01：あらゆる人が集う広場としてのにわ

【目的がない場をあげたことで、地域の課題がみえてくる】
県営住宅には、子供のいるご家族、高齢のご夫婦、一人暮らしの高齢者の方、片親で子育て中の方、若いご夫婦、障害のある方といった多様な人が住んでいます。そんな日々の生活の中で、県営住宅の集会所は住宅内だけでは補うことのできない暮らしのいとなみを補う存在であるべきだと考えます。大きな緑側を中心に居場所を作ること、皆さんの活動を受け止め、誰もが暮らしやすいまちづくりの貢献をします。

みんなとご飯が食べたいなあ...
みんなと仲良くないかい...
友達とあそぶ場所がほしい...
おはなし相手ほしい...



自然に集える使いやすさ

02：水呑と県営住宅を繋ぐえんがわスラブ

内外にまたがるえんがわスラブを設え、団地の住民の方々とまちの方々の居場所、両方の側面をデザインして繋げます。ふらっと座れる緑側のような、ごろんと横たわれる和室のような。どちらの落ち着きも持つえんがわスラブは、県営住宅の顔として皆さんが自然に、ついで時間を過ごせる居場所となります。引き戸を開け放すことで、おらかな半屋外空間としての利用も可能です。

新しいシンボルをつくる
・「山並み」に呼応した切妻屋根と「街並み」に呼応した片流れ屋根を組み合わせます。2つの風景に呼応させ、周辺環境と調和した佇まいは丘の上の新たなシンボルとなります。

切妻 片流れ

AA'断面図 S=1/100



おおらかな土間・えんがわが広がる平面プラン

建物は県営住宅に面した土間空間・道路側に面したえんがわスラブ、その2つの間を通る通り、の3つのエリアで構成します。シンプルなプランのなかに、様々なスケールの空間がお互いに関わり合いながら散りばめられています。

平面構成ダイアグラム

- 通りになわ
- セキュリティ
- 可動式建具

えんがわスラブとは対照的に、トイレや倉庫など機能をもった土間エリアは土足でのアクティブな活動、集会などを支えます。

自然に集える使いやすさ

03：通りになわ

古い長屋にみられた通り庭は、お客さんをもてなす場、台所、裏の物置とさまざまに表情を変えながら暮らしを支える居場所として使われた半屋外空間でした。この建築の中心に位置する幅1400mmほどの通りになわも、トップライトで明るく照らされ、土間・えんがわで行われる出来事を支える余白として、モノや人が溢れていきます。

内部でも通りになわに対しての緑側という顔を持つえんがわスラブ。南面は7mにおよぶ連続引戸で内外が仕切られています。柱より外側の位置にレールを設け、全8枚の引戸が柱のつかかりなく動かせるようにすることで大きく開けるようになっています。

建坪面積 126.3㎡
延床面積 102.0㎡
面積表 (㎡)
集会所 (キッチン3.2㎡を含む) 56.4
トイレ 6.7
倉庫 9.9

自然に集える使いやすさ

04：あらゆるシーンを受け止める

集会所はこれといった限定された用途を持たない様々な出来事が起こりうる空間のため、機能的な居場所である必要があります。そんな集会所をつくるために、多くのシーンを想定した柔軟なプランニングの中に、人の居場所のスケール感を組み込みながら設計します。機能的でありながら、今までにはなかった日常的な居場所にもなる計画をします。

新しい集会所とともに過ごす県営住宅での生活の地図

新しい日常

集会、ワークショップ、レクチャー、はぐくみ、お昼ごはん、みんなでご飯、まち、お祭り、地域のイベント、山、瀬戸内海、川

愛着が湧く居心地の良さの創出

05：ソフト面からテリトリーとしてのにわへ

県などの行政という「他者」が主体となって建設した建物を、使い手が実際に自分ごととして受け入れることは簡単ではありません。私たちは「ここに居てもいい」という安心感や、自分の領域(ナワバリ)としてこの集会所を捉えてもらうため、みんなで作り上げる工程を大切にします。

例えは、

- ・ 施工段階で内装の洗い出し土間などをワークショップで行う
- ・ 建物内の植物をみんなで育てていく

といったはたらきかけを通して、ソフト面からも、訪れる人が繰り返し日常的に利用するような精神的な居心地のよさをつくりだします。

外部計画・建替事業との関わり

06：配置にとられないプラン

現在の配置は、団地を北側に、低層である集会所を南側に配置することで敷地全体で採光の取れたプランとしています。建て替え事業に伴い配置に変化があった場合も、

- ・ 団地の内側に向く土間エリア
- ・ 外側に向くえんがわスラブ

といった配置を維持することで、コンセプトや機能性を保つことのできる柔軟な設計としています。

土間と通りになわを連続させることで、大人数で利用できる環境を作ります。

使い慣れた建具や空間で行われるイベントや集会は、より身近なものになります。

工事費 管理におけるランニングコストへの配慮

07：シンプルな構造・仕口で多様な空間をつくる

基本的な柱のスパンを910mmで統一し、規格を描えやすくすることで経済的なプランとします。

土間棟和小屋組み
えんがわ棟のほり梁組み

1820mm 断面構成図 S=1/150

- ・ 可動式の建具を多く用いることで、長期間にわたってフレキシブルに平面を変更することができます。
- ・ 床仕上げを土間、板張りの2種類にし、えんがわスラブ以外を段差のない土間仕上げに統一し、バリアフリーな空間としながら清潔に保ちやすくなることでメンテナンスに配慮します。

緑側スラブと土間空間の間にトップライトで採光を確保した通りになわを通すことで、明るい通りになわにみんなの活動が溢れます。

脱炭素化への配慮

09：設計の工夫でエネルギーを抑える

- ・ 長く開口を設けたえんがわスラブは軒を深くとり、開口全体を通してカーテンやすだれを用いて直射日光を避けることで日射をコントロールし、建物の負荷を軽減します。
- ・ 通り土間に沿った屋根部分をポリカーボネート素材として採光をとることで、日中は照明いらずの明るい空間とします。
- ・ 自然エネルギーの活用や高断熱化、高効率の空調システムなどを積極的に取り入れ、環境負荷低減に配慮します。

① 使いやすい大空間

日常的には座布団・テーブルなどの家具が置かれている土間・えんがわスラブは、集会所などの大人数での利用の際は1つの大空間として約30名ほどの収容人数を持ちます。黒板・スクリーンなど集会の際に正面にできる場所がいくつかあり、規模やタイミングに合わせてフレキシブルに集うことができます。更にえんがわスラブの引戸、土間の大扉を開放することで、屋外も連続してより大きく使用することも可能です。

② 可動の建具

日常づかいの際には居場所のスケールをおとして利用できるよう、可動式の建具を用いて空間を分けられるようにします。これらは皆さんが簡単に動かすことができ、自由に空間を拡張したり、分けたり、つなげたりすることができます。このような仕掛けは、機能的なだけでなく愛着や居心地の良さにも繋がります。

台所とそとを繋ぐ 戸戸
最大4mを開放できる 連続引戸
掲示板やカーテンを吊るす 吊りレール
土間空間を拡張できる オーニング